

「雄馬くん、また寝ぐせで来たの？」

「寝坊しそうだったんっすよ！でも涼介さんがかっこよくしてくれるでしょ？」

女優鏡の前で笑う、ぼさぼさ髪の桜井雄馬は最近女性の心を鷲掴みにしている売れっ子俳優だ。この時代には珍しい強引な俺様キャラを見事に演じきり、俺様再ブームを巻き起こしている張本人。

先日は「抱かれない男」というまた時代遅れなランキングに堂々一位。しかし本人は俺様というよりちょっと抜けてる大型犬。4歳しか離れていないのに弟みたいに感じる。

「もう、スキンケアはちゃんとした？」

「教えてもらったやつだけ～」

硬い茶髪のくせっ毛をヘアクリップで止めて、化粧水を含んだコットン

を毛穴一つない頬に滑らせる。彼の専属メイク担当になってもうすぐ3年が経とうとしていた。

目立った功績もない俺をずっと指名してくれて、売れた今も任せてくれるのは嬉しい。けど、自分の技術が彼に追いついていない気がする。

慕われているのは分かるけど、もっと雄馬くんを輝かせる人はいるんじゃないか。

ベースメイクを終え、先にリップコンシーラーをのせていく。ちらりと鏡越しに仕上がりを確認して、そっと顎を持ち上げ近づいた。指先が降れた瞬間、ぴくりと睫毛が揺れて瞳がさ迷う。

「はい、薄く口開けてね」

「ん……」

知らないふりをしているけど、雄馬くんは顔に触れるたび耳が赤くな

る。こんな初心な子が抱かれない男、か……。成人前から知っているけど、この調子じゃ悪い人に捕まらないか不安だ。今日もまた、染まった頬を隠すようにパウダーを払う。

「はい、セットも完了。おまたせ」

「どう、かっこよくなりました？」

「ふふ、かっこいいよ」

鏡越しに答えれば、満足そうに笑って席を立つ雄馬くん。穏やかな垂れ目をさらに下げて、僕の肩に少し触れていく。

「じゃあ、先に行ってますね」

そんな朗らかさなんてどこ吹く風。ひとたびカメラが回ってしまえば、自信満々で上から俺様雄馬様が現れる。何度見ても切り替えがすごくて驚いてしまう。あんな顔をまだ隠し持っているんだ、と。

ドラマの撮影は佳境に入って、今日は大事な告白シーン。相手を掻き抱いて感情をぶつける場面だ。何十人のスタッフが見守る中、撮影が始まる。

「何回言わせれば気が済むんだ。さっさと俺にしとけよ……」

そのまま激しいキスをして、カットがかかった。このあと寄りの撮影があるため、雄馬くんに近づきメイクを直す。楽屋のときとは違う、獰猛で鋭い目つきはやっぱり「抱かれない男」そのものだ。今はまだ役が抜けてないのか、ギラギラした瞳がこちらを射抜いてくる。

いつもは見てこないくせに。なんて言わずに黙ってリップブラシを手にとった。キスでよれた口元を直していると、すりっと指が頬を撫でた。

「こら、僕は相手の女の子じゃないよ」

「……分かってる」

何が分かってるんだ！

意味ありげに口の端を撫でたと思えば、人差し指の腹で輪郭を確かめるようになぞって、耳の裏をすりすりと擦られる。ぞくり、脊髄にビリビリした刺激が走った。

楽屋とは違う、意地悪で試してくるような目で見ってくる。そんな手つきで触られると、どんな顔をしていいか分からないだろ。

「はは、耳弱いんだ？」

「……雄馬くん、切り替えて！」

名前を呼ぶと、ぱちぱち瞬きをした。丸くなった目が僕を捉えると、いつものように視線をうろつかせる。弄んでくる手は宙に浮き、そのまま両手をあげて降参ポーズをとった。

「ご、ごめん。役が抜けなくて。嫌でしたよね」

「……びっくりするから止めてね」

もうすぐ撮影が再開されるらしい。またスタジオの薄暗い端っこの方に移動してひとつ息を吐いた。

貫かれるような、こちらを捕食しようとする瞳。それに反して優しい指先。撫でられた耳はまだジクジクと熱を帯びていた。

「あんな熱、向けられたら堪ったもんじゃないな……」

今日の撮影が終わると、とことこ雄馬くんがこちらへやってきた。メイクブラシを片づける手を止めると、さっきまで吊り上がっていた眉毛を思い切り下げている。

「涼介さん、さっきはごめんなさい……」

「ふ、あはは！大丈夫だよ。それだけ役に入ってたってことでしょ」

もう崩れてもいい頭をポンポンと撫でれば、周りに花が咲くように分かりやすく嬉しがる。

狼とかハスキー犬とか言われてるけど、今は尻尾ブンブンの大型犬だ。高い頭をちょっと下げて撫でてもらおうとしてるなんて、ファンの子が見たら倒れちゃうかも。

「雄馬！ビッグニュース！」

「マネさん？どしたの？」

「虹川さんの雑誌撮影が決まったぞ！」

「え！すごいじゃん雄馬くん！」

カメラマンの虹川さんは有名で、独特で耽美な世界観が代表的だ。虹川さんに撮ってもらえたら一人前、という人もいるくらい。雄馬くんも嬉しそうにして、僕の肩をポンッと叩いた。

「じゃあ、涼介さんもよろしくね！」

「えっ」

思わず固まってちらりとマネージャーさんを見やれば、やはり微妙な顔をしている。はは、と乾いた笑いをして、雄馬くんの手を下ろした。

「さすがにそれは、もっとちゃんとした人に頼んだら？」

「なんで？ 涼介さんだってプロじゃんか」

「えーと……」

自分で言わなきゃ、いけないか。真っすぐこちらを見据える目から逃げて、薄暗いスタジオの床を見つめた。

「虹川さんって、納得いく写真を撮るには妥協しない人なの。すごく厳しいって有名だし。そんな人を納得させられるメイクは、僕にはできないよ」



そう、僕の代わりなんていくらでもいる世界だ。いくら積み上げてきた信頼も、ネームバリューと運と、たしかな実力でいくらでもひっくり返される。

それこそ、雄馬くんみたいに人気が急上昇した人の裏には、たくさんの日の目を見なかった人がいるんだ。僕はそちら側というだけ。

視界の端で少し安心しているマネージャーさんを捉えていると、ぐっと腕を引かれた。目の前には、真剣な表情でこちらを射抜く垂れ目。いつものふわふわした雰囲気でも、カメラ前の鋭いものでもない、雄馬くん自身の真っすぐさだった。

「なんでやる前からそんなこと言うんですか。俺、ずっと涼介さんに任せてきたんですよ？もう、あんた以外に顔触らせる気無いんだけど」

「そ、んなこと……」

言われてしまったのはこちらから断れないだろ。自信が無いから、と諦め

ることを知らない若者が怖い。輝きに身を焼かれそうだ。今までずっと、僕の手だけが彼の顔に触れてきた。その事実と信頼を、自分で潰してしまっているのだろうか。

心配そうなマネージャーさんに頭を下げる。こんなに期待されてしまえば、こっちも本気を見せないと。

「不安かと思いますが、雄馬くんを任せてもらえませんか」

そんな大層なことを言ってしまったら、こちらもしっかり準備しなければいけない。虹川さんの雑誌をかき集めて勉強したり、今の雄馬くんのイメージと固め直したり。

あっという間に撮影当日になった。正直緊張で吐きそう。

楽屋でひとり、スキンケアアイテムを並べたりメイク道具を最終確認したりして、マイナスな考えをかき消していた。

「これで大丈夫かな……」

「なに、緊張してます？」

肩に顎を乗せられ囁かれた。低い声が急に鼓膜を揺らして、驚いて振り返ると普段通りの雄馬くんが笑いかけている。なんで本人が余裕そうなんだ。

「緊張してるよ……。あの衣装とセット見ちゃうとさ」

先ほど見に行った撮影セットはシンプルな背景に水面と浮かぶ鮮やかな花たち。衣装もモード系から奇抜なものまで取り揃えられていて、何パターンも撮影することが伺えた。それに合わせてメイクも変えていくことになるだろう。

自分の中の引き出しをひっくり返していかなければいけない現実、気が遠くなっていた。

「大丈夫だよ、涼介さんなら」

「簡単に言ってくれるね」

「だって、虹川さんってすごい人ですよ？俺がちゃんと俺でいるために、涼介さんに頼んだんだもん」

最初の衣装に着替えた雄馬くんにケープを掛ける。いつものように前髪をクリップで止めて、鏡越しに見つめた。今日はばっちり目があって、ちょっと鼓動が落ち着く。そうだ、今は緊張している場合じゃない。

今は、この売れっ子俳優に指名されている、信頼されていることを糧に。震える手を何とかおさめて、顔に指を滑らせた。

キリッとした眉毛と垂れ目が、俺様キャラなのにどこか甘くなる彼の特

徴。目じりを衣装に合わせて赤く染めていく。長い睫毛はゆるくあげて紫色のマスカラで色気を上乘せ。雑誌用に粒の大きいラメアイシャドウで縁取って、締め色を乗せて強気に見せていった。いつも上げている前髪を下ろして、ちらりと見える鋭い視線で惹きつけるように。

ひとつの芸術品を創り上げるように重ねていったメイクは、ずっと見てきた雄馬くんの魅力を最大限引き出せただろうか。あの世界観に負けないけど溶け込むラインを攻められたらどうか。

「はい、セットも完了。おまたせ」

「どう、かっこよくなりました？」

いつもみたいに聞いてくる雄馬くんに、しっかり頷き返した。

「うん、すごくかっこいい」

「じゃあ今日は大成功だ」

どれだけ緊張したって、結局表に立つのは雄馬くんだ。いいことも悪いことも浴びるのは表舞台の人たち。だから自分は逃げている。石を投げつけられないところから、輝かしい舞台を見つめているくらいがちょうどいい。

撮影が始まると、気難しそうな 40 代くらいの女性がヒールを鳴らして入ってきた。虹川さんだ。スタッフたちが挨拶するなか、雄馬くんを上から下まで舐めるように見ていく。自分が見られているわけではないのに胃が痛い。雄馬くんは自信ありげに、黙って微笑んでいた。

「あなたが桜井雄馬くんね。今日はよろしく」

「撮影に参加できて光栄です。よろしくお願いします」

「で、メイクは誰？」

「は、はい！」

急に呼ばれて駆けていけば、顔も見られず指示が飛んできた。

「リップ、もう少し深い赤に変更して。肌もマットに。照明で色飛ぶから全体的にもっと濃くして。すぐ撮影始めるから急いで」

「はい！」

久しぶりのひりつく現場。しかし、この空気が嫌いではなかった。

撮影は順調で、虹川さんの指示に従って次々とポーズを決める雄馬くんは本当に色っぽくカッコいい。

「さすが桜井雄馬。虹川さんの世界観に合わせてくるねえ」

「これはいい表紙になるでしょう」

普段テレビでは見せないような静かな魅力に、スタッフは全員息を忘れるほど魅了されていくのが分かる。僕もその一人で、この作品に携われたことに高揚感を覚えるほどだ。

「ちょっと絡みのカットも欲しいわね」

「女性モデルは何人が待機してます」

「うーん……男がいいわ」

途端に現場がざわついた。

男性モデルは用意していなかったらしく、急いで色々なところに電話を掛けています。しかし、撮影再開までにどれだけ時間がかかるか……。とりあえず、と雄馬くんのメイクを直しに入ると、今日初めて虹川さんと目が合った。

「いいモデル、いるじゃない。あんた、たしかメイクさんよね？」

「え？あ、はい」

「そうね……桜井くんとは真逆の雰囲気だし、メイクもできるんでしょう？」

「え、えーと……」

そんな、嘘だよな？嫌な予感がよぎり、背中にイヤな汗が伝った。



思わず雄馬くんを見れば、心底楽しそうに笑っている。こ、こいつも敵か！！

「彼を使うわ。早く着替えてメイクしてきて。イメージは……」

止まった思考に何とか伝えられるイメージをメモしていく。追い出されるようにスタイリストさんに連れられて着替え、急いで手を動かした。

なんで？ どうして僕がモデルすることになってんの？！

大変ですね……と憐みの目で見られる中、雄馬くんの隣に何とか立てるように顔面を仕上げていった。

「虹川さん、良いんですかあんな素人をモデルに……」

「あら、メイクアップアーティストなら自分の魅力も引き出せないようじ

やダメでしょ？」

涼介さんのことを言いたい放題言いやがって。

休憩に入り、水を飲みながら軽く睨む。それが分かったのか、笑顔の虹川さんが金の長い髪を靡かせてこちらへ振り向いた。耳打ちしていたスタッフは、俺の不機嫌そうな顔を見て肩を竦めている。

「あの子、ずっとあなたの担当なの？」

「はい、デビューからずっと」

「そう、やっぱりね。あなたの彩り方を知ってるから、こんなにいいものが出来てるのね」

思わず目を見開く。現場にいるスタッフは皆、俺の力だと言わんばかりの感想だったのに。

カツカツとヒールを鳴らして目の前に立った虹川さんが、口の端を上げて挑発的に言い放った。

「だけどダメよ、あんまり可愛がりすぎるのも」

「……気を付けます」

スタジオの入り口がざわついた。そこにはモード系の衣装に、普段とは違う色気を纏った涼介さん。自信がなさそうに縮こまっているのに、俺を見つけた途端ほっとした顔でこちらへ駆けてくる。

俺とは違い涼し気な目元はアイラインで吊り上げられ、緑のアイシャドウがこちらを誘惑してきた。柔らかい黒髪はサイドに撫でつけられて、いつもより大人びて見える。

「い、いかがでしょうか」

俺と交互に見比べて、虹川さんは何も言わずセットへ歩いて行く。肩を落としてしまう涼介さんの手を引いて自分たちも足に向けた。

「ちょ、やっぱり駄目だったんだよ。雄馬くんひとりで……」

「何も言わないってことは、文句ないってことでしょ」

「早く位置について。時間無いんだから」

ぱっと顔が明るくなる。そうだよ、涼介さんは最高のメイクアップアーティストなんだよ。

ただちょっと、俺が閉じ込めちゃってるだけ。

ごめんね、でももう少しだけ。

「ほら大丈夫、俺がリードするから」

……と言われても。モデル経験のない人間は棒立ちかピースくらいしかバリエーションが無い。動きが硬いと言われても、素人にはこれが限界

だ。くすくすと笑い声が聞こえる。だめだ、帰りたい。

「じゃあ桜井くん、その人のことは大道具だと思って好きにして」

「はい」

もう人間にもしてくれないらしい。どうしたらいい？と視線を送ると、急に腕を掴まれて抱きしめられる。普段少しだけ感じる甘いムスクの香水がふわりと鼻腔を通り、距離の近さを示してきた。思わず離れようとすれば、耳に唇を寄せられる。

「あんたは大道具でしょ。動くな」

あのときと同じ熱を感じる。カメラに背を向けていてよかった。

僕の肩越しにレンズを見つめる雄馬くんは言葉の通り僕を撮影の道具として上手く使ってくれてるらしい。不自然な手を写さないように、雄馬くんの上着をきゅっと握る。それに気づいたのか耳元で笑われた。

「ふ……かわい。まだ緊張してんだ」

「するでしょ、そりゃ」

「ほら、綺麗な顔見せてやれよ」

ぐっと後頭部を掴まれ顔を上げさせられる。視界いっぱいに雄馬くんの顔が広がって、首から上に熱が集まった。メイクするときより近い距離に、少し動いたらキスをしてしまうくらいほど。

ギラついた瞳が恥ずかしさも全てお見通しな気がするのに、視線を外すことを許してくれなかった。

「おっけー、次。水に寝そべって。美術品みたいに」

指示を理解する時間なんて与えられず、雄馬くんに促され水面に沈む。いつの間にか回された腕に頭を預けると、そのまま引き寄せられた。水も滴るいい男、なんて言葉で言い表せないほどの色気。こんな近くで見えていいもんじゃないだろこれ。

「メイクさん、桜井くんの頬を撫でて。はい、僕が作った最高の男の顔ですよ～って感じでこっち見て」

なんだその指示。そう思うけど、今までで一番分かりやすい。雄馬くんがかっこいいと褒められるたび、少し得意げになっていたのは確かだ。

どうだ、僕のメイクで輝く姿は。これが僕の最高傑作だと。

シャッター音が遠くで聞こえる。もっと彼を見ろ、とレンズを見つめれば、水面が揺れて顔が近づく。

そのまま頬ずりをされて視線を寄こせば、愛おしそうな瞳がこちらを見つめていた。そうだね、楽しいねと笑い返すと、ぎゅっと抱えられ水面に押し倒された。

「ちょっと!？」

「あはは!びしょびしょ」

笑いながら髪をかきあげる仕草だけで人の心を惹きつける。そのままわ  
ちゃわちゃと笑いあっていれば、虹川さんから爆弾が落とされた。

「いいね、ちょっと雄馬くんの前、肌けさせて」

「はい、涼介さん」

「え、僕が？」

何もせずいたずらっ子のような笑みを向けてくる男を睨みながら、シャ  
ツのボタンを一つずつ外していく。みっともなく手は震えるし、動くたび  
に水音が響いて何も恥ずかしくないのに身体が熱い。

全てのボタンが外れて綺麗な上半身がこちらを見てくる。何回も見た、  
何も気にしていなかったはずなのに目が離せない。

「ほら、こっち見ろって」



顎を掬われ視線を捕らわれる。ゆっくり指が絡めとられ、もうどこにも逃げられなくなってしまった。鼓動がどんどん早くなって周りの声が届かない。顔を伏せたいのに、腕は動かないし真横は水。

ただ長い睫毛が上下するのを見つめていれば、ふっと笑われてそのまま顔を抱き込まれ距離がゼロになる。

ごりっ。下腹部に熱いものが押し付けられた。途端、周りのざわめきがクリアになる。

「うん、一旦確認しよっか。次の準備よろしく」

虹川さんの声でガウンを持ったスタッフさんがこちらへやってくる。受け取って羽織ってもまだ熱は引かない。するりと手が取られ、ゆっくり手の甲を撫でられた。顔を上げて、後悔する。

そんな、何も隠せていない目で見られたら、ついて行くしかないだろ。

無言で手を引いて歩く雄馬くんの背中について行く。目的地は楽屋だったらしく、後ろ手で施錠した音がやけに響いた。

「雄馬く……んっ、はあ」

「あんた、そんな顔見せてどうなりたいわけ」

それはこっちのセリフなんだけど。喰らいつくしてしまいたいと言わんばかりの視線を向けられて平常心で居られるわけない。

荒く唇を奪われる。息継ぎしようと開いた口に熱い舌がねじこまれて、上顎をくすぐられると足の力が抜けた。そのまま壁に押し付けられ、濡れた前髪を払われる。

「ずっと綺麗だと思ってたけど、まさかそんな綺麗になって出てくるなんて」

「は、はあ♡雄馬くんの隣に立つ、から……」

チッと舌打ちをしてガウンを脱ぎだす。そのまま僕のガウンも脱がして既に勃起した熱を服の上から撫でてきた。びくっと腰を引くと一気に下着まで下ろされる。隠そうとした腕は壁に縫い付けられ、唇だけじゃなく耳や首にキスが降ってきた。冷たい肌に熱い唇が這うのが気持ちいい。

「あっ♡ま、ここっ♡楽屋……！」

「バタバタしててこねえよ」

骨ばった少し冷たい手が陰茎を扱う。直接的な快感に顎が上がり、舌を突き出した情けない顔を見られてしまう。先走りに濡れて滑りのいい芯はどんどん硬くなり、興奮しているのを自白しているようで恥ずかしい。

「やっ♡あ、ああ……はあっ♡だめ、だ……っんん！♡」

「まだイくなよ。ほら、俺も気持ちよくして」

「え？あ……っ♡♡」

ぼろんっ♡

寛げた前から出された陰茎は自分のよりも一回り大きく、ビキビキと裏筋が浮き出ている。

自分より上の雄を相手にしている。思わず喉を鳴らせば、頭をくしゃりと撫でられた。

「俺の見て興奮してるの？変態じゃん」

「ちがっ！そ、んなこと……っ」

「ほら、扱いて」

そろりと触れば火傷しそうな熱が伝わってくる。握りこんで上下に動かせば、ぴくりと腹筋が痙攣するのを見て安心した。止めなきゃいけないのに、自分の手で快感を拾っている雄馬くんの顔から目が離せない。

眉根を寄せて感じ入っている顔がエロくて、その顔でこちらを見て欲し

くてキスをした。少し驚いた後、挑発的に笑われる。

「なんだ、余裕そうじゃん」

「え、そんなこと……っ！あ、やめっ♡♡ふ、うは♡」

くちゅくちゅ♡ちゅぽっ♡

耳の淵をわざと音を立てながら舐められる。尖らせた舌先が穴を突いて、耳たぶを甘噛みされると下腹部に熱がずくりと溜まっていく。

ぞわぞわと頭の後ろに靄が掛かって甘く痺れた。自分も知らない弱点があぶり出されていって怖い。

「んっ♡♡やだ、みみ……♡あ、うう♡は、はあ、んッ♡♡」

「ほら手止まってる」

「むり、そんな♡あ、あんっ♡ふ、ううんッ！♡♡」

何とか扱う手を再開しても、初めての快感にすぐ止まってしまう。雄馬

くんはわざとらしくため息を吐いて体を離す。止めないといけないのに、  
体温が離れていくのが寂しくて上着を掴んだ。

「そんな物欲しそうな顔して、悪い大人だね。涼介さんは」

「ちがっ……」

「舐めて？俺のちんこ」

「え、それ、は……」

「そしたらもう、何もしないから」

フェラしたら止めてくれる？

もう正常な判断ができない頭は、そろそろと膝を曲げてしゃがみこむ。  
ふわりと雄の匂いが広がって尻込みするが、舌を伸ばして鈴口をちろちろ  
舐めた。

苦みが口に広がるのも興奮材料になってしまう。僕で興奮している雄馬  
くんがいる、という事実が理性をどろどろに溶かしていった。